

発話の非流暢性と自然さ：非流暢性教育の前提検証

Disfluency and naturalness of speech: Verification of the premise of disfluency education

定延 利之[†]

Toshiyuki Sadanobu

[†] 京都大学

Kyoto University

sadanobu.toshiyuki.3x@kyoto-u.ac.jp

概要

本発表は、母語話者式の非流暢性を身につけることが学習者に役立つことを日本語について示そうとするものである。学習者 20 名に、発表者（日本語母語話者）の流暢な言い方と、概ね同内容の非流暢な言い方をできるだけうまく真似させ、それを録音して日本語教育関係者（母語話者 68 名と学習者 43 名）に自然さを評価させたところ、非流暢な言い方の方が高い評価を得る場合が多かった。この結果は、母語話者式の非流暢性が、学習者にとって有益である可能性を示唆している。

キーワード：非流暢性、非流暢性教育、日本語

1. はじめに

現在の第 2 言語教育では多くの場合、目標とされる発音は、ニュース原稿を読み上げるアナウンサーのような流暢な発音である。提示されるモデル会話に非流暢な発話は（フィラーぐらいで）乏しい。しかし現実の母語話者の会話には、さまざまな非流暢な発話が多かれ少なかれ現れる。母語話者式の非流暢性は学習者が獲得したいと願う対象でさえある (Lickley 2015)。このような認識のもと、発表者らは母語話者式の非流暢性を学習者に教える「非流暢性教育」を提唱・実践している（例：定延 2004, 船橋・趙 2021）。

2. 目的

母語話者式の非流暢性の教育が有効であることを実験的手法で検証した試みは、実はこれまでにない。本発表ではこの試みを部分的に行おうとするものである。

母語話者式の非流暢性の教育が有効であると示すには、「学習者が母語話者式の非流暢性を身につければ自然に聞こえること」だけでなく、「学習者に母語話者式の非流暢性を身につけさせる教育ができること」も示す必要がある。本発表は、これらのうち後者は扱わず、もっぱら前者を示そうとするものである。これは、非流暢性教育の方法論を検討する以前に、そもそも母語話者式の非流暢性を身につけることが学習者に役立つの

か否かを明確にしておきたいということである。

3. 方法

発話音声の収録は 2025 年 1 月 20 日～30 日の間に、合計 6 回に分けて、日本語学習者を対象に、インターネットを通じて実施した。

学習者は日本語教育機関の学生 20 名であった。彼らの日本語会話の能力は、ばらつきがあったが、発表者との日本語会話には支障がなかった。

収録対象は、概ね同じ内容を語る、流暢な発話 1 個（例：(1)）と、母語話者式の様々な非流暢性を含んだ発話 3～4 個（例：(2)-(5)）から構成される発話セット（例：(1)-(5)）である。

- (1) 限度額の変更は、3 月には間に合わない見通しです。
- (2) げん、限度額の変更は、3 月には間に、間に合わない見通しです。
- (3) 限度額一ーの変更ですねえ、3 月一ーには間に合わな一ーさそうですので
- (4) えっとお、限度額のお、変更はあ、3 月にはあ、間に合わないみたいでえ
- (5) 限度額、うーの お一変更は、あ一3 月、うーにはあ一間に合わないと、

発話セットは合計 12 種類用意された。全 6 回の収録の各回ごとに、1 人の学習者につき発話内容が異なる 2 種類（8～10 発話）が使用された。

収録には、発表者と学習者の他、人材派遣会社の社員が学校関係者が立ち会った。収録において、各発話は、スライドの形で 1 発話ずつ学習者に提示された。スライドには、通常の文字表記の行（例：(1)～(5)）の下に、ひらがな表記の行も設けられ、その行には、韻律（高低）の指示も上付き線や下付き線で与えられた。

発音の指導は発表者が 1 人で、学習者 1 人あたりにつき最大 15 分をかけて行った。指導は、発表者が実演する発話のとおり真似させるだけで、語音、アクセン

ト、リズム等に関する細かな指導はできる限り控えた。

収録された学習者の発話音声を、発表者のモデル発話の音声に近いものを中心に選別し、同一話者による、概ね同じ内容の、流暢(*fluent*)な発話音声 F (5 秒間) と、母語話者式の非流暢(*disfluent*)な発話音声 D (5 秒間) から成る発話音声のペアを 10 個作成した。選別に当たっては、同じ話者の発話は 2 ペア以上に使わず、同じ内容の発話も 2 ペア以上作成しないように注意した。モデル発話からの逸脱が少ない部分どうしを接合した結果、用意された発話セットとは文言が僅かに異なる発話音声もあることを断っておく。

印象評価実験では、同一話者が発話音声 F と D を話していることに評価者が気づくと、それだけで評価者は「発話音声は自然な自発的発話でない」という印象を持ってしまうことが予想された。そこで評価者を A・B の 2 グループに分け、発話音声ペアを構成する 2 発話のいずれか 1 発話を評価者 A グループ用、残りの 1 発話を評価者 B グループ用と無作為に振り分け、A グループ用の発話音声 10 個と、B グループ用の発話音声 10 個を用意した。上述の、同一話者や同一内容の発話が重複しないようにという方針も、同様の趣旨である。

印象評価実験は 2 回実施した。第 1 回は 2025 年 3 月 17 日、ラチャモンコン・ラタナコーシン工科大学 (バンコク) で実施した。評価者は、現地に集まったタイおよび近隣国の日本語教員 59 名と日本語学習者 9 名の合計 68 名である。これを 2 分して、A グループ (母語話者 33 名と学習者 4 名の 37 名) と B グループ (母語話者 26 名・学習者 5 名の 31 名) を作った。評価者 A グループには A グループ用の web ページ、評価者 B グループには B グループ用の web ページの QR コードおよび URL を提示し、各自のスマホから web ページにアクセスし、イヤホンで発話音声 10 個を聴取してもらった。各々の評価者は、話し手も発話内容も異なる 10 個の発話音声を聞いたことになる。

評価者に問うたのは、これらの発話断片が、実際に人と会話している最中の発話の断片だとしたら、どれぐらい違和感がないか、ということである。その程度を 5 点満点で評価してもらった (1 点: 違和感あり~5 点: 違和感なし) (無償)。

第 2 回は 2025 年 3 月 25 日、国立政治大学 (台北) で実施した。評価者は、現地に集まった台湾の日本語教員 7 名と日本語学習者 34 名の合計 41 名である。これを 2 分して、A グループ (母語話者 3 名と学習者 21 名の 24 名) と B グループ (母語話者 4 名・学習者 13 名

の 17 名) を作った。他の点は第 1 回と同様である。

4. 結果

結果は、発話音声 D が発話音声 F より概して違和感が少ないというものであった。第 1 回は、発話音声 10 ペアのうち、F が D より違和感が少なかったのは 1 ペアのみで、残り 9 ペアでは逆に D が F より違和感が少なかった。第 2 回でも、F が D より違和感が少なかったのは 3 ペアのみで、残り 7 ペアでは D が F より違和感が少なかった。

5. 考察

以上の調査結果は、「母語話者式の非流暢な発話を身につければ、学習者の日本語発話は自然に聞こえやすくなりがち」という傾向を示唆している。「母語話者式の非流暢性の教育が有効」と主張するための第 1 段階が示されたと考えてよいのではないか。

第 1 回で例外となった 1 ペアは第 2 回でも例外となっており、発話音声ごとの詳しい検討が今後必要と考えられる。また、日本語教育関係者だけでなく、一般の日本語母語話者を評価者とする検証も今後必要である。

謝辞

発話収録に協力された 2 校 (学校法人創都学園東京アニメーションカレッジ専門学校, 21 世紀アカデミア専門学校東京クールジャパン・アカデミー), パーソルテンプスタッフの皆様、印象評価実験に協力された皆様、田畑安希子様にお礼申し上げます。本研究は科研(基坂 S, 20H05630)の成果である。

文献

- 船橋 瑞貴・趙 南星(2021). 学習者の母語を考慮した非流暢性の教育, 日本のローマ字社 (編)『ことばと文字』14 号, 43-58 くろしお出版
- Lickley, Robin J. (2015). Fluency and disfluency. In Melissa A. Redford (ed.), *The Handbook of Speech Production*, 445-474. Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- 定延利之(2004). 音声コミュニケーション教育の必要性和障害, 『日本語教育』123 号, 1-16.